

転生者はチートを望まない2



フラルカ

.....
フィーメリア王国初代女王。
800年前、大陸の動乱を
治めた偉大な女性。

アーヴィル

.....
影魔法を操る
謎の人物。なぜかミラを
気に入っている
が……？

アインセルダ

.....
フィルセリアの兄。
爽やかな外見に
似合わず、実は腹黒。

フィルセリア

.....
水魔法をメインに操る
フィーメリア王国国王の
孫娘。通称「姫様」。

ガイ

.....
魔術学園に通うミラの
幼馴染み。
火の魔法を操り、
魔法騎士コースに
在籍。

ディーネ

.....
水の精霊。
おしゃまな性格で
長い髪を
束ねている。

グノー

.....
地の精霊。
ミラの大魔法によって
高位精霊になり、
イケメンに変身。

ミラ

.....
魔法世界に転生し、魔術学園に
通う6歳の女の子。
最強魔力と精霊の力を借りて、
様々な魔法を操る。
ただし体力はない。

ルフィー

.....
風の精霊。
ミラに翼を貸したことで
高位精霊に
成長。

サラ

.....
火の精霊。
わんぱくな性格で
腰には短剣を
携えている。

登場人物
紹介

プロローグ

ハロー。

私はフイーメリア王国イルガ村に住む農家の娘、ミラだよ。ただ今六歳！ ある日、幼馴染みのガイが投げたボールが頭に当たって、前世の記憶が一部甦よみがえっちゃった。てへ。

……って、ダメだ。ボツ。こんなテンションで書き続けるのはムリ！

私は考えた文章に頭の中で大きくバツテンをつけ、新たな一文を考え始めた。

万が一の可能性だけど、私以外にも日本人——転生者でも召喚された人でもかまわない——がこの世界に来た時に、先達せんだつとして何かメッセージを残しておきたかった。もちろん、私が生きているうちに会えればなおいいんだけど。

だけど、これが中々難しいんだな。さっき考えたような文章だと、最初から最後まであのテンションを維持するのは厳しいし、よくよく考えてみれば、読んだ人はドン引きじゃないかな？ うん、やっぱりやめとこう。

かと言って——『三年に一度行われるフイーメリア王国国立魔術学園の選抜試験が、イルガ村で行われた。その直前に前世の記憶の一部を思い出した影響か、試験にて膨大な魔力と、地・水・

火・風の属性を持つ事が判明』——なんて文章は堅苦しい。

第一これじゃあ、三頭身の精霊達の可愛らしさが伝えられないじゃない。却下だ却下。

いっその日記風に書いてみようかな。でもって、興味本位で読まれるのは嫌だから、冒頭には「呪つちやうぞ？」なんて書いたらどうだろう。

これから私が魔法開発とかで名を残すような大物になれば、本当に呪われるって、信じられちゃうかもね。クスクス。

冗談半分、本気半分で考えながら、私はフィーメリア王国の王城内をガイと共に闊歩する。

選抜試験で四属性すべてに適性を持ち、かなりの高魔力保持者であると認定された私は、国の補助と支援者を得て、王都にある魔術学園に通う事になった。

同じく基準をクリアして合格したガイと一緒に騎士様達に連れられて王都にやってきてみれば、なんと私達の支援者は王家に決定していた。しかも、ホームステイ先は寮ではなく王城。

さっそくご挨拶をと、拝謁を許されたのだけど、国王陛下はダンディーなおじいさまだった。第一王位継承者であらせられる王太子様は、私の両親と同じくらいのご年齢。当然ながらお子様もいらっしやる。十四歳の王子様と、六歳のお姫様だ。

王子様はさらさら金髪碧眼のテンプレ王子様で、花のように笑うが、実は腹黒。

初対面でいきなりプロポーズされた時はびっくりしたよ。すぐに魔力目当ての政略結婚の申し込みだと気がついて辞退したけどね。前世を含めて根っからの庶民である私に、第二王位継承者の妻なんてムリムリ。ストレスで胃に穴を開けろとおっしやるのか？

同い年のお姫様は、ふわふわプラチナブロンドに碧眼。お人形のように可愛らしいお姫様。

ちよっとツンデレなブラコンで、人見知り。でも、ホームグラウンドである城内では、人見知りはしないらしい。姫様が実は人見知りである事を知ったのは、学園に通い出してからだ。王城内を案内してくれた時はそんな気配は全くなかったから、すごく意外だった。

そしてせっかく姫様に王城内を案内してもらったけど、私の記憶力では、どこに何があるのか覚えきれなかった。

いいのよ。最低限の生活圏内で迷子にならなきゃ。わからなくなったら、その辺の人に尋ねれば教えてくれる。もしくは連れて行ってくれる。ただし、人を選ばないと物陰に連れ込まれて、「王子様に求婚されたのは事実か？」なんて訊かれるけどね。

嘘をついたって碌な事にならないのはわかりきってるから、「恐れ多いので辞退させて頂いております」と答える事している。——てか、「いいえ」と答えたところで信じまい。

魔力チートは王家の支援という御利益をもたらしてくれたけど、面倒事も運んでくる。

プラマイゼロ？ いやいや、やっぱり面倒な事の方が多いかもしれない。チートは厄介事の種になる可能性が高い。持ってしまった物はしょうがないから有効利用できるようなろうと決めただけど、面倒事はノーサンキューだ。どうせチート能力を持つのなら、トラブル回避能力もセットで欲しかった。

幸い、今向かっている場所は誰かに道を聞く必要はない。私にとって宝の山みたいなところだから、ばっちり記憶している。人間、興味がある事のためには、高い記憶力を発揮するものだ。

目的地である大きな扉の前に辿り着き、私はぴたりと足を止めた。
フィーメリア王国のお城には、図書室がある。

この世界には活版印刷の技術がないため、本は決して安くはないのだけれど、ここは国の中枢。必要があれば購入するし、貴族からも寄贈される。そのうえ宮廷魔術師が己の研究論文を献上する。つまりこの図書室は、知識の集まる場所なのだ。

学園にも図書室はあるけれど、蔵書数はこちらの方が圧倒的に多い。もし私が王家の庇護を受けていなかったら、ここは利用できなかっただろう。うん、その辺は素直にありがたい。

ガイが図書室の扉を開けてくれる。

「ありがとう」

「おう」

小さな声で言葉を交わし、私達は中に入った。広い室内には、大きな本棚がずらりと配置されている。そして整然と並べられた本。背表紙を見ているだけで、胸に込み上げてくるものがある。

（ああ、本がいっぱい）

一歩室内に入ったとたん、他の利用者が視線を投げかけてくるけど気にならない。古い本特有の匂いにうっとりしながら、私はいつもの席へと向かった。

読書欲を満たすため、たゆまぬ努力でようやくこの世界の文字をスラスラと読めるようになった私は、是非とも行きたい場所があった。それがここ。なぜなら学園の図書室は、基本的に初等部の子供が授業以外で利用するのを禁じているからだ。まあ、ここも学園の図書室と同じく、小さな子

供の出入りはあまり歓迎されないだけだね。

なにせここにある本は、全部手書き。無邪気なお子様が手荒に扱って、破損したら大変だ——大量生産された本なら傷つけていいってわけでもないけれど。みなさん、本は丁寧に扱いたしよう。というわけで子供である私にとっては入りにくい場所なのだけれど、どうしても本が読みたかった。魔法書だとか文献だとか、もつともつと。それで思いついたのが、支援者へのお願い。学園は身分に関係なく学ぶ場所だから、支援者が王族だからって、特別扱いはしてもらえない。だけど城内の図書室なら……

でも、庶民が国王陛下にお願い？

相手は支援者だけど、ハードルが高すぎる。棒高跳びレベルの高さだ。

同じ理由で王太子様も無理。かと言って諦めきれなかった私は思い出したのである。王子様が私とガイに誕生日プレゼントをくれると言っていた事を。

あれは私の誕生日と新年祭をすぎ、ガイの誕生日が近づいた一月の上旬の頃だった。一つ歳を重ねたばかりの私に、王子様はこうおっしゃった。

「昨年はミラさんの誕生日を祝えなくて残念です。最初の出立で魔力喰らいに出会わなければ、間に合っただけでしょう。そうだ、ミラさんには去年の分とあわせて二つ贈り物をしましょう。去年の分のプレゼントは、欲しい物が決まったら教えて下さい」

その後ガイともお話しした王子様は、ガイの誕生日に彫刻セットをプレゼントしていた。リクエスト通りの物を貰ったガイの喜びようといったら、という事は私へのプレゼントも欲しいものをく

れる可能性は高い。だけど政略結婚のプロポーズを受けた身としては、深読みしてしまうのですよ。求婚アプローチの一環かも、と。だから、自分からリクエストはしないでおこうと決めたのだった。それらの経緯から私は迷いに迷ったのだけど、結局は図書室の管理人さんへの口利きを、王子様にお願ひすることにした。初のおねだりである。

入室には、【図書室で騒がない、飲食しない、許可なく本を持ち出さない】との条件がついたけど、「精霊王に誓ってもいいです」と即答して許可をもち取った。

「そんなに図書室に入りたいのですか？」

王子様は私の初めてのおねだりが図書室の利用許可なのが不服だったようだけど、私にとつては何よりも価値があるのですよ。それこそ、宝石なんかより。だから「もちろんです」と、握り拳こぶしを作つて断言した。本当に感謝してます。

以来、学校から帰ってきてからはもちろん、お休みの日は朝食を終えるやいなや図書室に向かい、様々な図鑑や魔法の研究記録、ドラゴンなどの他種族について書かれた文献を読みあさっている。

書籍は紙に書かれた物がほとんどだったが、羊皮紙ようひしや魔獣の皮を加工した物もあった。装丁の一部にドラゴンの鱗うろこを使った珍しい本もあったりして、それらは手に取るだけでもファンタジーな世界に浸る事ができる。

そんな私の後ろをついて来るのは幼馴染みのガイだけで、グノー達契約精霊はここにはいない。悪戯好きの精霊達は、図書室への入室を禁止されているのだ。今頃彼らは何をしているかなと、私は思いをはせる。

学園の入学試験で水晶玉の中にいた、四人の小さな精霊達。それぞれ、地・水・火・風を操る彼らにねだられるままに名前をつけてしまった私は、それ以来、彼らの契約者となってマスターと呼ばれている。でもその関係性は主従というより友達かな。

私はふと、夕べの出来事を思い出した。明日は朝から図書室に行くと言った私に、水の精霊・ディーネが小さな瞳をウルウルさせて拗ねた事を。

『最近マスターは本に夢中で、遊んでくれないです』

そんな事を言われても……だって活字かつじが私を呼んでるんだもの！

そう言ったところで、活字中毒なんて精霊達には理解できないだろう。けれど罪悪感をまるで感じないわけではない。私は両手を合わせて謝った。

「ゴメンね。実践で魔法を覚えるのは楽しいけど、他の魔術師がどんな魔法を作ったかとか本で知るのも面白いの。何かいいアイデアが浮かぶかもしれないし」

開発したい魔法や道具がいっぱいあるから、どうアプローチするか考える材料にしたいし、本で知った魔法のアレンジを考えるのも楽しい。それを形にして精霊協会に登録すれば報酬が貰えて、実家への仕送りができるのもいい。子供らしく遊ぶのも忘れる気はないけどね。私の場合、遊びイコール読書になりがちだけど。

「お昼から飛行魔法の練習をする予定なの。最近暑くなってきたし、練習の前に水で涼すずもう。ね？ディーネ、力を貸してくれる？」

ディーネは一瞬顔を輝かせたけど、他の子達の手前か、慌てて表情を取り繕った。そんな彼女を見て、地の精霊・グノーがクスリと笑う。

『ディーネだけが魔法を使う事になっても、僕はディーネを羨んだりしないよ。それに図書室に精霊が入るのはあまり良い顔をされないから、マスターのためを思うなら付いて行かない方がいいんだよ』

『私はちよつとヤです。なのでマスター、風魔法も使います？ 使いますよね？』

自分も自分も、と主張する風の精霊・ルフィーに、私は微笑みを返した。

「うん、使うよ」

風を起こしてスプリングラーのように散水したり、水をもつと細かい霧状にできるか実験してみたい。寝ぐせ直しに使っているミストは水魔法しか使っていないから。

最後の一人、火の精霊・サラを見ると、『暑いなら、火魔法は使わないだろう？』と言って、プイツとそつぽを向いてしまった。

「ねえ、サラ。明日は無理かもしれないけど、今度時間がある時に、熱を操る魔法で水を冷やせないか、試してみない？」

加熱するだけじゃなく、熱自体を操る事ができたなら、水魔法で氷を作ったり、冷却作用を持つ水の魔石を作り出すより便利かもしれない。

ちなみに魔石とは、魔獣や魔物を討伐して得る核であり、魔力を込められる石の事である。

『何それ、面白そう！』

泣いた鳥かももう笑った——とはちよつと違うか。にしてもチョロい子である。

精霊達と交わした約束を思い出した私は、今さらながら、ちよつと心配になって独りごちた。

「飛行魔法の練習だから、サポートしてくれる人は、風属性魔法騎士のブルムさんしかいないんだけど……水を作って操るだけだし、ブルムさんだけでも大丈夫だよね？」

さすがに火魔法は危ないかもしれないから、サラには火属性であるキーナン隊長にサポートをお願いしてからねって、約束したけど。

不安を打ち消すように頭を振り、私は目の前の事に集中した。

本棚から、ここ最近読んでいるドラゴンについての文献を探し出して抜き取る。大判のそれを落とさないように抱えながら、本棚の間を通り抜けた。

図書室にはいくつかの閲覧スペースがある。研究者気質の魔術師は自分の研究を盗み見られる事を嫌うので、小さめのテーブルが距離を置いて設置されていた。

書籍の盗難対策としては、退出時に男女の係員がボディチェックをすることになっている。

いつも利用している人気がない閲覧スペースに着いた私は、本をテーブルに置き、手荷物の中から紙の束とペンとインクを取り出した。ガイもここへ来る途中に選んだ植物図鑑をテーブルに置き、肘をつきながらパラパラとページをめくりだす。

しばらくはページをめくる音と、私が本から抜粋した文を書きつけるペンの音が響いていたけれど、ふいにそこに寝息が混ざった。ちらりと視線を向ければ、図鑑を横へずらし、机に突っ伏して

眠るガイの姿。

「ガイ？」

呼びかけてみるが反応はない。植物図鑑を手に取って、皺しむやヨダレなどがついてないか確認している間も、ガイは目を覚ます様子はなかった。

「よし、寝オチする前にちゃんと避難させてるね」

図鑑を傷つけたら、連帯責任で私も図書室への出入りを禁じられてしまう。だから本音を言えばガイにはよそで遊んでいて欲しいのだけど、勉強したいと言うのだから追い払えない。もつとも、ガイの本当の目的は高所恐怖症になった私を助ける事みたいだけどね。

もう一ヶ月ほど前になる。初等部から高等部までの各第一学年が対象となった合宿で、阿呆な貴族がガイに無理難題をふっかけた。

「火属性の身体強化で崖から飛び降り、着地して見せる。王家の庇護ひごを受けているからには、そのくらいできるだろう」

崖に追い詰められたガイが足を滑すべらせて落下したその瞬間を、私は姫様の占術魔法で目撃した。

ガイと良いライバルになりつつある公爵家の若様が、手合わせの約束をしたにもかかわらず現れないガイを探しに私のもとに来なければ、私は幼馴染おさなじみを失っていただろう。

若様がガイを探してくれていて良かった。

姫様が占術魔法を使えて良かった。

だからガイを助けるため、ルフィーを高位精霊へと成長させて彼女の翼を借り、空を飛んだ事に

も後悔はない。とんでもない高度と速度への恐怖に耐えたせいで、高所恐怖症になっちゃったけど。というわけで、風の精霊との合一ごういつで可能となった飛行魔法は、その日限りでお蔵入りくらいりになった。

それからというものの、ガイは可能な限り私の側にいる。

学園ではガイと私は所属するコースが違うから、同じクラスの姫様か、合宿中に友達になった隣のクラスのケイナが私の面倒を見てくれた。ケイナの手下……もとい、幼馴染おさなじみのA君ことアサー君や、B君ことベルタ君が助けてくれる事もしばしば。ありがたい事である。

彼らは手すりのない階段では手を取って一緒に下りてくれるし、高い場所にある物は私の代わりに取ってくれる。ガイは図書室にまでついてくるのは、あくまで自分の勉強のついでで言い張るけど……

「読み始めていくらしんないうちに居眠りをしていたんじゃないよ？」

ほつぺたをちよんと突ついても、ガイは起きなかった。私は植物図鑑を机の上に戻し、新しい紙を用意すると、再びペンを走らせ始めた。だけど今から書くのは、本から抜粋した文章じゃない。

綴つづる文字はこの世界の装飾過剰なアルファベットもどきではなく、日本語。ここでは、日本語の文章が解説困難な暗号になるのだ。私は日本語のそんな利点を使って、前世の記憶が戻ってからの出来事を書く事にした。

これで解読する人が現れたら、それはもう仕方がない。諦めよう。

ガイの投げたボールが頭に当たったせいで、部分的に前世の記憶を思い出した事から始まり、魔術学園の入学試験のために、村に調査隊が来ていた事まで書く。宮廷魔術師のインさんと、魔法騎士のキーナン隊長、彼の配下であるブルムさんにパナマさん、グゼさんに出会ったのはこの時だ。でもって大きな水晶玉の中に、グノー達がいたんだよね。

今はグノーとルフィーが高位精霊となって、人間で言うと十七、八歳くらいの外見年齢に成長しちゃったけど、あの時は四人とも三頭身のおちびさんだった。

可愛かったなあ。ガイが水晶玉に手をかざしたら、サラがちっちゃい手を振り回してさ。次に私を手をかざしたら全員大はしゃぎ。まあ、それがチートが発覚した瞬間になったわけだけど。

基本的に魔力の資質は一人一属性。なのに私は四属性も持っていた。しかも後に精霊協会で作った身分証——ステータスカードによれば、魔力総量は三万。大人でも平均値は二百なのに。多すぎでしょう。

その代わり、体力は三十だった。同年代の子供の平均が五十。

……しよぼすぎて情けないかぎりである。

それから精霊眼。これは特殊能力ではあるけれど、私以外にも持っている人はいる。精霊眼は魔力や精霊達の姿を視る事ができる力だ。ちなみにインさんは視えないけど、感応力と呼ばれる力を鍛えているから、感じ取る事はできるそう。キーナン隊長達を含む大半の魔術師は精霊を視る事はできないし、感じないのが普通だから、魔法を使う時は精霊任せで魔力の受け渡しが行われている。

まあそんな事はさておき、希少な四属性持ちの私を護衛しつつ王都へ戻れとの命を受けたインさん達に甘えて旅費を浮かし、私とガイは試験の三日後、馬車に乗って王都へ向かったわけだね。その道中、最悪の魔獣と呼ばれる魔力喰らいに襲撃された。

騎士様達は私達を逃がして戦ったけど、魔獣は魔力の影響で頑強な体を持っているし、魔法を撃つても食べられちゃうから苦戦。最後は私が奴を落とし穴に落とした。だけどその後、馬車が壊れていて使えないわ、怪我人だらけで馬に乗って助けを呼びにいける大人がいないわで、もつと痛めつけてやれば良かったと思っただよ。まあ、幸いグノーがこの時に行使した魔法で高位精霊になっていたから、彼に馬を操ってもらって、助けを呼ぶために村に戻れたのだけ。

一度目の出発とその顛末までを書いた私は、そこでいったん手を止めた。思いつきり背伸びをしたら、肩がゴキキュッと鳴った。うーみゆ、もつと本格的にストレッチをすべきだろうか。

頭の上で手の平を重ねて、右に左にと体を倒して筋肉を伸ばす。続いて後ろに背を反らそうとして、私はハツとして動きを止めた。別に視線を感じたわけじゃないけど、これって端から見れば、怪しい事このうえない動きかもしれない。

頭上の手を解いた私は周囲を見回してから、次に書く事を整理した。

「えーと、この後は村に戻って勉強漬けにされた事と、精霊達に名づけをしちゃった事ですよ。それから誕生日にグノー達に作ってもらったカレンダーの事とか、初めての王都でお城にビックリした事も書かないとね」

協会でカードを発行してもらった時の事なんか印象深い。なにせ水晶玉からカードが浮き上がってきたんだから。

新年祭のパーティーも忘れちゃいけない。王家の見栄だからと言いくるめられて、高価な宝飾品つきのドレスで着飾ったのは緊張したけど、料理も美味しかったし、楽しかった。

「よく異世界で料理革命を起こすトリップものがあるけど、この世界の料理は是が非でも革命したくなるような酷い味じゃないからよかつたよね」

そりゃ、お米は食べたいし、味噌や醤油が恋しい。探せばどこかに類似した食品があるかもしれないし、なければ開発したついでいいのかもしれないけれど、味噌や醤油は発酵食品だ。簡単に作り出せるものじゃない。下手をして食中毒を起こしたらどうする。

危ない橋を渡らなくても、この国のご飯は十分美味しいから幸せだ。サラダはシャキシャキだし、ジャガイモはほっくり甘い。果物はジュシー。肉だって旨味がたつぷりだ。サラダ用にマヨネーズを作るといふ展開もありかもだけど、正直私はマヨネーズよりドレッシング派。それがなければ塩でもいい。

「でも、唐揚げは食べたいかも」

イルガ村でも、王宮でも、揚げ物は見た事がない。

「スパイスはあるし、卵も小麦粉もあるんだから作れるよね。ああそうだ、てんぷらも食べたい。ポテチもいいな」

この世界の野菜を揚げたら、どんなに美味しいだろう。想像して口内にヨダレが溢れる。ああ、

いけないいけない。私は慌てて口元を押さえた。ヨダレはこぼれてはいなかったけど、ポカんと口を開けている姿を人に見られたくない。

周囲を見回して人がいない事を確認した私は、安堵の息をついた。けれど困った事に、一度生まれた欲望はそう簡単に収まってくれそうにない。

トンカツやコロッケ、エビフライ。ドーナツや大学芋の味まで思い出してしまふ。

「いやいや、落ち着け私。いつの間に食いしん坊キャラになった」

自分に言い聞かせた瞬間、クーっとお腹が鳴って、思わず赤面する。

「……もうすぐお昼かな？」

ガイを見れば、まだ起きる様子はない。

午後からは魔法の自主練——というよりもトラウマ克服のための訓練を行う予定だ。精霊達はお昼を食べてから呼び出す約束になっている。

私はペンとインクを片づけると、日記を書いた紙を持って席を立った。そして、もう少し奥の本棚へ向かう。

図書室通いで目星をつけていたその棚は、羊皮紙を束ねた物が中心だ。手に取る人があまりいないのか、うつつらと埃が積もっている。私は手早く最下段の本の後ろに用紙を隠して、踵を返した。日記はこの世界の文字で書いていないから、自分の部屋に隠して誰かに見つかっても、読まれてしまう事はない。だけど、メイドさんに見つかった時に何を書いたか言えないのが一番の問題だ。でもここなら、私の行動を調べて探さないかぎり、そうそう見つからないはず。

「それに私の部屋に隠していたら、同郷の人がこの世界に現れても、絶対に見つけてもらえないしね。学園を卒業して部屋を明け渡したら、大掃除で焼却炉行きだろうし」

その点、図書室は宮廷魔術師やお城に勤めている人達が利用するために、公的なエリアにあるから出入りに制限はない。しかも今現在埃が積もっている様子からして、頻繁に掃除されているわけではなさそう。蔵書整理でもされない限り、アレが捨てられる事はないだろう。

私が席に戻ってきてても、ガイはまだ夢の中だった。

「ガイ起きて。ブルムさんを迎えに行くよ」

ガイの肩を揺すって声をかけると、彼は眉を寄せて何かを呟いた。

「ガイ？」

「ぬー……ぜったい、とんで……むにゃ」

再び名前を呼ぶと、今度は比較的はつきりと言葉を紡ぐ。

「……飛ぶ？」

飛ぶと言えば飛行魔法だ。でもガイは使えない。私も今は、自由に使えるとはいえない。

「それもこれもあの双子のせいだ。よし、合宿の時の事も日記に書いておこう」

先達として忠告——阿呆な貴族にはご注意を。

第一話

私とガイは騎士団の練兵場へ向かった。普段の休日なら、王族の勉強をしている姫様達と合流してお昼ご飯を食べるんだけど、今日はブルムさんを迎えに行った足で騎士団の食堂を利用するつもりでいる。

飛行魔法の訓練は、今日が二度目。最初は高所恐怖症とスピード恐怖症という問題点を二つも抱えていては、諦めるしかないと思っていたんだけど……事件から七日目のお茶会で、私は飛ぶ訓練をする事を決意した。

その日、窓から城下町を眺めていた姫様が、ポロリと言ったのだ。

「空から見る王都は、ここから見る景色とは違うのでしょうか」

思わず口をついて出た言葉に彼女自身が驚いたらしく、次の瞬間には口元を押さえていた。

「わ、わたくしも空を飛んでみたいと思っただけです。あの時のミラが大変だったのはわかっていますもの。景色を覚えていない事を非難しているわけでは……」

「わかってますよ、姫様」

私は安心してもらおうと微笑んだ。

あの時、とてもじゃないけど、景色を楽しんでいられる余裕なんてなかった私は、彼女の問いに

は答えられない。でも――

「いつかきつと、姫様を空に連れて行って差し上げます。待っていてくださいますか？」
慌てる姫様も可愛いなあと思いつつ、私が目を細めてそう言うと、姫様はちよつとだけ目を丸くした後、微笑んでくれた。

「はいですの」

そういう理由で、私はさつそくその日のうちに、介助役のガイと一緒にグリーンガム魔術師長に相談に行ったのだった。

「ふむ。気長に訓練をして、高さと移動速度に慣れていくしかないじゃろう。考えられる訓練は二つじゃ。一つ目は風の精霊と合一した状態で、階段から飛び降りる事。高さを一段ずつ上げての。二つ目は、真上に浮き上がる高さを徐々に上げて行く事。そのくらいじゃろうか」

もふもふのおひげを撫でながら魔術師長様は虚空を見やり、「じゃがのうお」と続けた。

「これらの方法には、ある懸念があるんじゃ」

「懸念ですか？」

彼が何を心配しているのかわからなかった私は、小首を傾げる。

「精霊との合一は、お主の意志を魔法に直接反映するのではないかの？ 確か報告書には、大気を圧縮した時は、言葉にして指示を出したとあった。じゃが飛んでいる時の事については、特に細かな記述はなかった。明確な指示を出しておらんかったのではないか？」

「そう言われてみれば……」

確かにそうだった。落下中、大気圧縮の壁を造る時は口頭で指示を出したけれど、飛んでいる時に私は何も言っていない。無意識にイメージしたものが反映されていたと考えるべきだ。

「グリーンガム様、詠唱なしで魔法が使えるか、試してみてもいいですか？」

「おお！ もちろん良いぞ。むしろ見たい」

興奮して、ソファから身を乗り出す魔術師長様。

私は席を立って戸口へと移動した。本や書類、実験器具的な物がそこかしこに積み上げられている執務室では、ここからバルコニーへの動線が、唯一開けたスペースなのだ。ちなみに執務室は高い所にある。窓から外の景色が見えてちよつと怖いけど、十二分に離れているから我慢できないほどじゃない。

「ルフィー、試してみたい事があるから手伝って」

呼びかけに応じて緑色の光が室内に現れ、次の瞬間、光は美少女の姿となった。

後ろの一房だけが長い緑色の髪。白地に深緑のアクセントが入った、騎士のような衣装。そして背中には大きな翼。私の契約精霊のうちの一人、風の精霊・ルフィーだ。

「あのね、合一した状態で魔法を使ってみたいの」

『はい、マスター』

なぜとも聞かず、ニコリと笑った彼女は風に姿を変えて私の体を包み込む。ルフィーと合一した私の背中に、翼が現れた。私は両手を重ねて前へ突き出し、イメージする。

(大気を圧縮。薄く強固な壁に！)

本来ならば不可能な、無詠唱による魔法の行使。けれどイメージ通り、前方へ伸ばした手の平の先に魔法陣は出現した。金緑色に輝く光が、逆巻く風を象徴した紋を描く。

「すげー、ホントに詠唱なしで魔法陣が出た」

「どれ、何かぶつけてみるかの」

ガイがポカンと口を開けて魔法陣を凝視する横で、グリーンガム魔術師長は試しにと魔法陣へ向け書き損じの紙を丸め、放った。それは大気の壁に跳ね返って、ポトリと床に落ちる。

「ふむ、やはり無詠唱が可能になるようじゃな。ならば訓練中、恐怖で魔法が暴走状態に入った時を警戒して、風属性の魔法騎士を立ち会わせた方が良いじゃろう。誰が良いかの」

なるほど、懸念事項とは魔法の暴走の事か。納得した私は魔術師長様に訊いてみた。

「グリーンガム様はお忙しいのですか？」

「忙しいと言えば忙しいの。しかし一番の問題はわしが地属性という事じゃ。魔石でお主の魔法の暴走を抑えられる自信はない。あと、若い方が体力もあるしの」

「ならスインさんもダメですか」

「あやつも地属性じゃ。しかし風属性だからと言って、お主の世話係であるエメル・シーダもいかに。魔力量的に、魔法の暴走を止めるのは不可能じゃ」

「ならブルムさんはどうだ？ 風属性だったる」

ガイの提案に、私はボンと手を打ち鳴らす。

「ブルムか。かまわんが……先ほどから顔見知りの名ばかり挙げておるの」

「魔法を使う時はあまり緊張しすぎない方がいいんですね？ 授業で習いました」

「魔力喰らい相手に、初めての魔法をぶっ放した子供が緊張のう……」

しみじみと言われて私は目を逸らした。それは言わないで下さい。あれはブチギレモードだったからできた事なんです……

「初対面の魔法騎士の方が魔獣より緊張するか」

魔術師長様はほっほと笑った後、しかしと続けた。

「ブルムよりも魔力の高い者はおるし、会ってみれば存外気が合うやもしれんじやろう。少し時間をくれれば、風属性の魔法騎士から候補を選んでおくが」

ありがたい申し出を受け、じゃあ……とお願したところ、どこから聞きつけたのか立候補者がとんでもない数となった。

数日後、再びガイと一緒にグリーンガム魔術師長の執務室を訪れた私は、名前と所属が書かれた長い長いリストを見て、笑うしかなかった。なんとも意欲的な人達だ。そのトップバッターには知った名前がある。

「ブルムさんもリストに入れて下さったんですね。しかもグリーンガム様の推薦枠で」

「お主らの第一希望じゃったからな」

「じゃあ、やっぱりブルムさんでお願いします」

私の訓練に立ち会うという事は、新たな魔法に触れるという事だ。飛行魔法は総魔力量の問題か

「ら会得する事は難しいのがわかりきっているから、立候補者が知りたいのは精霊との合一の方法か合一を可能とする条件はわかっていないけれど、会得すれば今まで不可能とされていた無詠唱による魔法の行使が可能となる。立候補者達は、少しでも得られる物があれば御の字と思つたのかもしれない。」

確かに飛ぶ飛ばないは別として、ルフィーとの合一は可能だから見せる事はできる。けど、今の私は飛ぶ前段階で大きく躓いていた。知り合いならいいってわけでもないけど、階段から飛び降りる姿を延々見守る役目を、まったく知らない人に頼むのは気が引ける。そんなわけで、ブルムさんに訓練の補佐を頼む事になった。彼の休日の半分を奪う形で。

「でも本人や周囲も合意の事とはいえ、本来のお仕事や鍛錬の時間を、あまり割いて頂くのはご迷惑では？　なんて言うんじゃないかなかったかな」

「では休日が重なる日につき合おう、だもんな。ブルムさんであれかな、仕事中毒ってやつ」

「待ち合わせ場所の騎士団の詰め所に行ったら、練兵場にいるって言うし。行ってみたら、鍛錬していたうえに、お昼ご飯も食べてなかったしね」

「食べ終わるまで待つって言ったのに、約束の時間だからってそのままミラの訓練に入っちゃうしな」

ガイが腕組みして、うんうんと頷く。

そう。ブルムさんは食事もせずに、私が階段から飛び降りる様子をずっと見守ってくれたんだよ

ね。ちなみに一番下の段から開始した。さすがの私もその高さには恐怖を感じなかったけど、ブルムさんに直立不動で見守られているのが気になった。

飛行魔法の訓練とはいえ、まだ高所に慣れるために飛び降りているだけだから、「暇ですよ？　今の所暴走はないと思うんで、食事に行ってもらっても構いませんよ」って、提案してみたんだけどね。

「いざという時、風魔法の暴走からミラさんを護るのが私の役目です。任務によっては思うように食事を取れない事もありますから、気にしないでください」

これが仕事と言われては、護衛対象である私は断れない。

「今日は絶対ブルムさんに昼食を取ってもらうんだから」

今から一緒に食べましょうって誘えば、食事を抜く事はないでしょう？　そのために、私達も今日はまだ食べていないんだから。

「騎士団の食堂ってどんなメニューがあるのかな。やっぱガッツリ肉系かな？」

ガイは目をキラキラ輝かせている。

「騎士は肉体労働だから、お肉を食べる人が多いだろうね」

「ぶあつーい牛肉とかあるかな？」

よく食べ、よく寝る子は育つって言うけど……

ついさっきまで寝ていて、今度は食事に期待しているガイ。これで成長しないはずがない。同い年の子の中でも体格に恵まれているガイは、成人する頃にはさらに立派な体格になっているだろう。

学園卒業後は魔法騎士かハンターか。

「……ガイツって何気にチートだよね」

「ちーと？」

「あ、えっと。ガイツってすごいよねって話」

思わず声に出してしまい、私は慌てて言い繕った。

「ミフに言われてもなー」

「そうですねー」。

「でもさ、ガイは火属性のクラスメイトの中では魔力が高い方でしょ？」

「まあな。バーランクには負けるけど」

「彼は公爵家の若様だもの。小さい頃から、跡継ぎとして鍛えられたはずだよ」

「それもそっか」

自慢げに胸を張ったかと思えば自分の発言で落ち込んで、私の言葉で復活する。忙しい子だ。

「だいたい、比べる対象が極端すぎるんだよね。でもその若様にかけて勝ったり、体術では、勝てないまでも結構いい線まで食らいついているらしいからすごい。私みたいに、転生者として特殊な力を持っているわけでもないのに。しかも本人はそれをちつとも鼻にかけないし、さらに資質を伸ばそうと努力している。」

「何この子、超優良物件。」

身分さえなんとかなれば、姫様に婿候補としてオススメしたいくらいだ。なんて考えていたら、

練兵場の入り口が見えた。入り口と言っても石壁が途切れているだけで、ドアがついているわけじゃない。

「すみません。魔法騎士のブルムさんと約束をしているのですが、いらっしゃいますか？」

「ん？ ああ君らは先週も来ていたな。ブルムね。呼んで来るからちよっと待ってる」

ちよっど入り口の近くにいた騎士様に声をかければ、彼はそう言っつて、奥へ歩いて行った。

石壁で区切られた向こう側から、「りゃー！」だの、「はっ！」だのと気合の入った声が聞こえてくる。私はガイと入り口から顔だけ出して、中を覗き込んだ。

カンツ、カカンツと木剣がぶつかっては離れ、ぶつかっては離れを繰り返す。カウンターを狙った斬撃が巧みな体捌きで回避され、再び木剣が打ち合わされた。めまぐるしく攻守が入れ替わる打ち合いに、私達は息を呑んだ。

トーテムポールよろしく縦に連なって見ていると、ふと背後で足音が止まる。体を捻ると、十七、八歳くらいの女性が両手に大きなバスケットを掲げて立っていた。

「こんにちは」

「こんにちは」

声をかけられて、ガイと一緒に挨拶を返す。

「こんな所でどうしたの？ 迷子かな？」

「いえ、迷子じゃないです」

「ブルムさんを待ってるんだ」

私達の答えに彼女は小首を傾げた。

「兄さんを？」

「お兄さん？」

「お待たせしました、ミフさん、ガイ君……おやイエナ。どうしたんです、こんな男臭いところにも？」

声のした方を見れば、ライトアーマー姿のブルムさんが小走りにやってきたところだった。

「男臭いって……女性騎士だっているじゃない」

ブルムさんにイエナと呼ばれた女性は、少し眉を寄せて反論する。

二人とも髪と瞳が薄茶色だ。ブルムさんはくせ毛の短髪、イエナさんは後頭部で髪を結い上げているけれど、少し残されたサイドの髪には軽くくせがあった。そういえば、顔立ちも似ている。

「ブルムさん、妹がいたんだな」

「そうみたいだね」

こそそこそとガイと言葉を交わして、頭上で行われる兄妹の応酬を見学する。

「それでも男が多いのは事実です」

「とかなんとか言っつて、恋人と会わせまいとしているだけじゃないのか？ この性悪兄貴が」

そう言いながら、さつきブルムさん呼びに行ってくれた騎士様が現れた。焦げ茶色の髪と瞳をしていて、髪は短く刈り上げている。騎士としては細身なブルムさんに比べるとがっしりとした体格で、ブルムさんの首に巻きつけた腕は太い。

「同じ年のお前に兄と呼ばれたくはないぞ、ケビン。あと離れろ、暑苦しい」

首に腕を絡められたブルムさんは心底嫌そうだ。暑いもんね。そのうえあの筋肉にひつつかれたら、その熱量はいかかなものか。ご愁傷様です。

「そう言うなよ、お前が魔法で風を纏ってるの知ってるんだぞ。かーつ、風属性は羨ましいぜ！ 少し風を分ける！」

そう言っつてケビンさんとやらは、ブルムさんにのしかかる。

……前世で言うところの『腐ったおねーさま方が喜びそうな構図』なのかな？ その手の用語らしき物が脳裏に浮かんだけど、この二人の絡みがあちらの世界で喜ばれるかどうかの判断はつかなかった。前世の私はそっち系のものに、興味はなかったって事だろうか。首を捻りつつ見学を続行していると、今度はイエナさんが動いた。

「ケビン、風なら私が送ってあげるわ。弱くて物足りないかもしれないけれど」

「イエナ……！」

彼女がケビンさんのたくましい腕に触れて呼びかけると、彼は感極まったかのようにイエナさんの名前を呼んで、あっさりブルムさんを解放した。そしてイエナさんを軽くハグ。

いきなり始まつちやいました、いちやつきターイム。

「イエナ、俺の可愛い恋人。いいんだよ、無理しなくて」

「ケビン。でもあなたに抱きしめられるのは、私だけでいいの」

……どんな反応をすべきだろうかね？

本音としては、「リア充爆発しろ!」と言いたい気持ちがなくはない。なくはないが、それは六歳児の反応として正しくないだろう。

(よし、ここはガイをお手本にしよう)

横目でちらりと見れば、バカッブルをガン見しているガイがいた。思わず「見ちゃいけません」と目を塞ぎたくなる衝動に駆られる。

これ、情操教育的に良くないんじゃないかなろうか? いやでも、この世界の平民の結婚年齢は低い……いいの? これ見せていいの?

彼の目を塞ぐべきか迷って、私はオロオロした。

「ゴホン」

頭上から咳払いが聞こえてきて振り仰ぐと、バツの悪そうなブルムさんと目が合う。彼はしっかりと私に頷いて見せて、バカッブルに向き直った。

「お前達、子供達の前だ。自重しなさい」

「あ」

「あら」

叱責を受けて、バカッブルはようやく人前である事を思い出したらしい。しかしなぜ、ガン見していたガイではなく私を見る。

集まる視線に気恥ずかしくなって、頬が熱くなるのがわかった。なんと言っていないかわからず、とりあえず思い浮かんだ事を小首を傾げて言ってみる。

「えと、席を外しますので、お気になさらず?」

一瞬の間。そしてブルムさんは大きなため息をつき、続いてケビンさんの頭をベシンとひっぱたいた。

「子供に何を言わせる」

「いや待て、今のは予想できんだろ!」

「か、かわいー!」

男達の諍いもなんのその。イエナさんは屈み込んだかと思うと、勢いよく私を抱きしめた。

(あ、いい香り)

って、そんな場合か! お姉様のハグに浸っている場合じゃないでしょ、私。

「兄さん、ダーリン。この子お持ち帰りしてもいいかしら。いいわよね?」

「いいわけがないでしょう!」

「ハニー、その子の養子縁組には貴族のお歴々が立候補しているんだ。一介の騎士である俺には難しいよ」

「えー」

全力でツツ込むブルムさんと、首を横に振るダーリンことケビンさんの反応に、イエナさんは不服のようだ。

てか、本当に貴族が私を養子にしようとしているのか。

(わお、ルフィーの情報収集力ってば侮れないね)

お父さん、お母さん、私はいつまであなた方の娘でいられるのか不安です。

悪い話じゃないのがネックだ。平民が貴族になれるなんて話、そうそうあるものじゃないもの。でも絶対に断ってくださいね。でない王子様のお嫁さんという未来に向けて、外堀を着実に埋められてしまうので。

「あら、そんなに引く手数多あまただなんて、この子何者なの？」

私をハグしたまま頭をナデナデしていたイエナさんの体が離れる。首を傾かしげて顔を覗のぞき込まれたので、私も一緒に小首を傾かしげてみた。

(さあ？ 何者でしょうね？)

「……ああん、もう可愛い！」

ものすごい速さで、再びハグされてしまった。ちよつと痛い。そして苦しい。

何者なのかと聞かれれば、「イルガ村のミフです」としか答えようがない。転生者ですとは言えないもの。

前世を思い出すまでは、村娘Gくらいのポジションだったんだけどね。それこそ勇者様一行いっこうが村に立ち寄ったら、村人と一緒に歓待の旗でも振ってそうなポジションだった。なのに、なんの因果かべらぼうな魔力を持っていた。しかも例の初飛行の翌日、総魔力量が増えてるし。

ステータスカードは地の精霊王様から貰う魔法の品だけど、コンピューターみたいなバグってあるのかな？ だって六万だよ？ 一気に倍だよ？ 大変言いづらいけど……地の精霊王様、ボケたんじゃないだろうか。

「イエナも食堂とはいえ城勤めだ。四属性の高魔力保持者が王家の庇護ひごを受けた話は、聞いた事があるだろうか？」

「ええ、兄さん。じゃあこの子がそうなのね？ すごく可愛いわ」

「あ、ありがとうございます」

こんな風に家族以外に手放して可愛いなんて言われるのは久しぶりで、ちよつと照れる。

「理解したところでイエナ、ミラさんが困っている。そろそろ離してあげなさい」

「はい」

イエナさんはようやく私を解放すると、スカートすその裾を払って立ち上がった。ブルムさんは彼女に、何をしに来たのかと尋ねる。

「今日は私、お休みなよ。だからダーリンとお昼ご飯ごデートをしようと思って。あとついでに休日にもかかわらず、鍛錬に行った仕事熱心な兄さんの分も持ってきてあげたわよ？」

と、いつの間にやらケビンさんの手に移っていた、二つのバスケットを指さすイエナさん。

「妹のデートに同席しろと？」

バスケットは二つしかない。イエナさんの分もあるという事は、この二つのバスケットに三人分の昼食が入っているのだろう。

「ダーリンにだけ持ってきて、兄さんの分は持ってこないのは悪いと思ったのよ。バスケットは二つしかないから、三人分を二つに分けているわ」

一応気を使ったらしい。

「そうか。なら悪いが、私の分もケビンに食べてもらいなさい」

「おいおい、さすがに男二人分はきついぞ。この後も訓練があるんだから」

ケビンさんがそう言うのも無理はない。お腹いっぱい食べてから騎士の訓練……。大惨事になってしまいかもしれない。運動前の食事は控え目がいいよね。

「しかし私はミラさんとの約束がある。迎えに来てくれているのだから、食べている暇は……」

「あ、私達もご飯まだです」

「またもやお昼抜き宣言をしようとしたブルムさんを遮って、私は挙手して言った。ガイも後に続く。」

「今日は騎士団の食堂で、ブルムさんと一緒に食べようってミラと話してたんだ」

「こちらの食堂で、ですか？」

ダメとは言わないけれどオススメもしないといった雰囲気ブルムさんに、私は今さらだけど確認してみた。

「騎士様以外は利用できないわけじゃないんですね？」

「それは大丈夫よ」

答えてくれたのはイエナさんだった。

「騎士団の食堂って呼ばれているけれど、ただ単に近隣に騎士団の施設があるっていうだけなのよ。利用者の大半が騎士だから、メニューは肉料理に偏りがちだけどね。魔術師もうちを利用するわよ」

パチリとウインクするイエナさん。

「お姉さんは、騎士団の食堂にお勤めですか？」

「そうよ。私はブルムの妹のイエナ。よろしくね」

「はい。私はイルガ村のミラです。こっちは幼馴染みのガイ」

「よろしく、イエナねーちゃん」

「うん。ミラちゃんとガイ君ね。よろしく」

「じゃ、俺も自己紹介させてもらうかな」

ケビンさんはしゃがみ込むと、私達と視線を合わせてニカリと笑った。

「火属性の魔法騎士、ケビンだ。ブルムの同僚で、イエナの婚約者。再来月には彼女と結婚する予定だ」

「それはおめでとうございます」

なるほど。周囲が引くほどのいちゃつきっぷりも納得である。マリッジブルーとは無縁そうだ。

「再来月って事は、夏至祭の日？」

ガイの質問に、ケビンさんは笑う。

「ははっ、さすがに当日は無理さ。夏至祭の日は王都在住の騎士は基本的に全員動員されて、警備のシフトが組まれるからな」

夏至祭は毎年七月七日頃、新月の日を前日祭として開催されるお祭りだ。日ごと暑さが増していく中、水の精霊に畑と人々の無事を祈り、翌日の日の出を迎えるお祭りである。

新年祭同様に、王都はたくさんの人で賑わうだろう。となれば、警備は必須。人の多いところでは、トラブルが起きやすいからね。

「食堂も一日中修羅場。慶事とはいえ、そんな日に人員を減らすと恨まれるしな」

「それに彼の実家は王都じゃないから、ご両親にはせつかくだから、夏至祭に合わせてきて頂く事になってるのよ。式はお祭りの三日後なの」

「三日後って、本祭の三日後、ですか？」

「そうよ」

私の問いにイエナさんはあっさりと肯定するけど、鬼のスケジュールだ。

だって夏至祭は前日から食べて飲んで踊って一夜を明かし、日の出を迎えるイベント。そのうえ本祭と呼ばれる日は、一部の脱落者を除いて、前日からの徹夜のテンションのままに浮かれ騒ぐ。さすがに二日連続で徹夜をする強者はあまりいないらしいけれど。そして翌日は後片づけだ。

イエナさん達の結婚式はその翌々日。休みは片づけ日と結婚式の間に、一日しかない。とんでもなくタフだ。

「わかっていてと思うが、本祭後の一週間の休みは、騎士団からの祝儀だからな」

「もちろんわかっているって。交代勤務とはいえ、本祭前日から続く一日仕事の徹夜明け。休みの希望が殺到する日から休みにしてもらったんだ。感謝してる」

ブルムさんの念押しに、ケビンさんは上機嫌に答えた。

なら結婚式までの休みは二日か。でもやっぱり強行軍には違いないような……

「わかっているならいい。それより話を戻しましょう」

ブルムさんはケビンさんに頷いてから、私達に向き直った。唐突に会話を振られて、私とガイは顔を見合わせて首を傾げる。

戻す？ どこまで戻す？ てかなんの話をしたたけ。

「なんだったわけ？」

「えーと。そうそう、お昼ご飯を食堂で食べようって話よ」

私はポンと手を打ち合わせて、ブルムさん達に尋ねた。

「ひよっとして、食堂はお弁当の持ち込みは禁止ですか？」

せつかくイエナさんが持ってきてくれたのだから、ブルムさんにはそちらを食べてもらえばいいけれど、私とガイは食堂で食べないといけない。この近くにあるのは騎士団の食堂だけど、子供だけでそこへ行かせる事を渋っているのかなって思ったら、ブルムさんは否定した。

「そのような規則はありませんよ。しかし昼時は混み合いますから、食堂で購入した料理以外を食べるのにテーブルを使うと、迷惑がられる事もあります。私が気になったのは量ですよ。とても子供の食べられる量じゃない」

おお。さすが騎士団が使う食堂。

「でも、女性騎士もいらっしやるんですよね？」

男性騎士よりは食べないんじゃないかな？

「彼女達は並盛りを注文しますが、一般的な食堂ではそれは大盛りに分類される量です。ちなみに

私達が食べるのは大盛り、もしくは特盛りです」

「一応、小盛りもできるわよ。魔術師や食事制限が必要になった騎士のために。でも食堂へ行く必要はないと思うわ。結構たくさん作ってきたから、ミラちゃん達の分くらい大丈夫」

イエナさんは「ね」と言っつて、二人の男性に目配せした。もしかして、少し控えて食べてちょうだいねって合図かなと推測してみる。

「それじゃ、話が纏まとまったところで移動しましょう。入り口で立ち止まっていると邪魔だから」

イエナさんに先導されて、私達は移動を開始した。練兵場の石壁に沿って歩き出すとすぐに、ブルムさんが口を開く。

「どこで食べるつもりです、イエナ」

「この管理施設の向こう側に、庭園があるでしょう。そこよ」

管理施設の角を曲がれば、先週私がトラウマ克服のために飛び降り続けた階段が見える。右手には目隠し代わりの林があり、それを抜けた先に芝生と低木、様々な草花いらくで彩られた庭園がある。王族専用ではなく、城で働く者達のために造られた憩どいの場の一つだ。

私達は藤むすに似た花が咲く東屋あずまやに腰を落着けた。

「じゃーん」

おどけた声と共にバスケットを開いたイエナさんが、その中身を私とガイに見せてくれる。

お弁当の中身は様々な種類のサンドイッチがぎっしりだ。炒り卵とハム。ミンチ肉とチーズ。チキンソテー（あ、この世界ではニワトリはコッコって呼ばれているからコッコソテーか）とレタス。

さすが騎士である婚約者と兄のために作ってきたお弁当。肉が多い。野菜のみのサンドイッチは、イエナさん用かな？

「おお、うまそう！」

「ちよっと待った！」

目を輝かせてバスケットの中に手を伸ばしたガイの手を、私は掴み取った。

「なんだよミラ」

「手を洗ってない」

「つつても、どこで洗うんだ？」

そう言われてみれば、そうだ。日本の公園ならばそこに飲用可能な水道が設置されているが、ここは上下水道のない異世界である。食堂でならフィンガーボールが用意されているけれど、屋外では水魔法を使うか、諦めるかの二択しかない。

「水の魔石ならありますよ」

ブルムさんがそう言っつて、幅広の腕輪にはまっている魔石を見せた。これがあれば風属性のブルムさんにも水魔法が使える。私は掴んでいたガイの手を離して、ポンと手を打ち合わせた。

「ディーネ、来て！」

呼べば中空に四つの光。あれっと思う間もなく、高位精霊二人とおちび精霊二人が現れた。

「……ひよっとしてみんな待ったの？」

『お昼には呼んでくれるって、マスターが言っつたもの』

どうかした？ とディーネが首を傾げるのを見て、私はなんでもないと返した。何となく、待てを言い渡されていた大型犬と小型犬が、今や遅しと飼い主の号令を待ち構えていたみたいに感じられて、おかしいやら微笑ましいやら。……ごほんごほん。

「ミラさん、ひよっとしてやってみたいんですか？ 清浄なる水」

ブルムさんは浄化魔法の練習かと聞いてきた。でも答えは否だ。

「いえ、清浄なる水はまだ使えそうにないです」

実体のない水で浄化するのは難しいんだよね。水を出す事はできるんだけど。

「では湧水？ しかしあれをするには器がないと。地面の上でなら、木々の水やりにもなりませんが」

「湧水でもないですよ。それだと、全員が洗うのに必要な魔力が多すぎますから」

湧水は、出す水量イコール必要な魔力量だ。私は無駄に魔力値が高いけど、必要ないところでは無駄遣いしない主義だ。

「最終的には植木にあげようと思っっていますが、水球を使います」

「攻撃魔法じゃーん！」

ブルムさんの疑問に答えたら、ガイが怯えた。そんなガイに、イエナさんが声をかける。

「ガイ君、何かミラちゃんを怒らせるような事したの？ 手を洗わないだけで、攻撃魔法を使ったりはしないでしょう？」

私、どんだけ理不尽な少女ですか。やんないですよそんな事。いくら怒ってたって、攻撃魔法を

叩き込んだりしませんって。ガイが相手なら、ほっぺたみよーんの刑で十分です。もしくは枕投げ。コントロールとガイの反射神経によっては、空振りに終わるだろうけど。

「火球は打ち出さずに留めておく事ができるので、水球も同じ事が可能だと思っんですよ」

ピンと人差し指を立てて主張すると、ケビンさんが不思議そうな顔をした。

「攻撃魔法を詠唱しておいて、打ち出さないって状況は普通はないんだがな」

「ケビン。彼女は火球を改変するために、初めての火魔法の行使で、停止状態にした子だぞ」

「へー。って事は、あの収束魔法を考えたのってこの子か！」

「気づいてなかったのか！」

「開発者の名前なんぞ見ないからなっ」

ケビンさんとブルムさんの会話がボケとツッコミになりつつあるのを放置して、私は東屋の外に出る。

出て水球を作る事にした。

「ディーネ、水球を作成。停止」

使った魔力は最小限。攻撃に使うわけじゃないから、大人の両手に乗るくらいの水量でいい。

空中に差し出した手の平の上に、金青色の魔法陣が描かれる。中央には雫の紋。そのうえに

水球が浮かんだ。

「ガイ。おいで、おいで」

ちよいちよいと手招いて、小走りに駆け寄ってきたガイに指示を出す。

「水球に手を突っ込んで洗って」

「水球に手を突っ込んで洗って」

「水球に手を突っ込んで洗って」

「……いきなりギョルンツて回転したりしないだろうな？」
「しないしない」

てかそれって洗濯機みたいだね。今度ハンカチでも洗ってみようかな？

ガイのおかげで、新しい魔法のアイディアが浮かんだ。この世界の洗濯は洗濯板でこするか、たらいの中で足で踏んで洗う。魔力が必要になるけど、作業効率が上がればメイドさん達も楽になるよね。問題はたらいを縦型に置けるか、横型のドラム式に置けるか。洗剤が少なくても汚れの落ちやすいのはドラム式だったつけ？ でも横にしたら蓋は必須。となると縦型しかないか……

私が思考を巡らせている間に、ガイが恐る恐る水球を突いた。右手の人差し指を突っ込んで、クルリとかき回す。何も起こらないのを確認して、右手を全部。続いて左手も入れてこすり合わせた。

洗い終えた手を抜きだしたガイは、ピピッと手を振って水気を飛ばす。

「で、どうすんだ、この水球」

「ん、ちよつと離れようか」

私はガイの腕を引いて、水球から距離を取った。

「でもってこうする。ディーネ、形状維持を解除」

とたん、水球は魔力を纏わなかったの水となつて地面に落下する。ぱしゃんと跳ね上がった水が、さつきまで私達が立っていた石畳まで跳ねた。けど、退避済みなのでセーフ。

「この跳ね上がりもどうにかしたいよね」

「そこまではいいんじゃないか？ 届かない距離にいればいいんだし」

ガイの言い分は確かにそうなんだけど、それはそれ。跳ね上がった泥で石畳を汚してしまったのも、申し訳ない。後で洗い流そう。

「でもやっぱり、最後までピシッと綺麗に決めたいし。地面すれすれまで下ろしてから解除すればいいかな。多少、必要魔力量が多くなるけど誤差の範囲内。むしろ降下で魔力を使い切つて自然解除に持つて行った方が、無駄がないかも……」

「ミラ、ミラ。今は魔法よりメシ！」

後半は完全な独り言となつて思考に沈み始めた私を、ガイが呼び戻す。ぱちくりと目を瞬くと、ガイの向こうにいる大人達が苦笑していた。

「ミラちゃんは魔法を考えるのが好きなのね」

「しかもこだわり派」

「研究者としては良い資質ですが、寝食を忘れるほど夢中になつてはいけませんよ？」

イエナさんが微笑まじげに言えば、ケビンさんが茶化すように言い、ブルムさんには諭される。「気をつけます」

私は殊勝に頷いたが、ガイがそれをぶち壊した。

「大丈夫、そしたらオレがまた声をかけてやるから」

いやいや、自重するから。社会生活不適応者にはならないから。だから甘やかすな、幼馴染み。

「さて、じゃあ食うか」

「『大地の恵みに感謝を』」

全員が水球ウォーターボールで手を洗い、改めて東屋あずまやのベンチに座る。そしてケビンさんの音頭おんびでいただきますに該当する言葉を捧げ、私達はサンドイッチサンドイッチに手を伸ばした。

「あ、ディーネ達も食べる？」

無心でコッコソテーのサンドイッチサンドイッチにがつつくガイの横で、私は卵とハムのサンドイッチサンドイッチを手に、ふと精霊達に声をかけた。

精霊達は人間の食べ物も食べられる。特に甘い物が好きなのか、お茶の時間に現れては、クッキーとかを喜んで食べていた。

ちっちゃい精霊達が身の丈サイズのクッキーを抱え込んで、ちまちま食べる姿は悶絶もんぜつものだ。精霊を持つ者だけが見られる光景。うふふ。役得役得。

ちなみに高位精霊になったグノーやルフィーもお菓子を食べるけど、何やら不満らしい。

『前は一枚でお腹いっぱいになれたのにな……』

『こればかりは仕方ないよ。でももう少し成長すれば、ね？』

『そうですね。成長すれば！』

とかなんとか言ってたっけ。成長すればどうなるんだろう。高位精霊のさらに上のランクって……霞すずみを食べる仙人のごとく、魔力だけでよくなるのか？ いずれにせよおちびでも高位精霊でも、甘い物はエネルギーにするためというより、嗜好品しこうひんみたいなものらしい。

あ、そういうえば前世の漫画に甘い物が好物で、ちびバージョンと大人バージョンの姿を持ったキャラがいた気がする。あれは精霊だったかな？ それとも封印された魔法使だったっけ？ なんか混ざってしまった。

でもそうだね、成長すれば好きな姿を選べるとかだったらいいな。だっておちび姿の再来が望めるじゃない。その日が来るのがちよつと楽しみになつたかも。

私が小さくちぎったサンドイッチを差し出すと、ディーネは首を横に振った。

『ご飯なら、マスターの魔力がいいです』

ふむ。それもそうかと納得した私は、ちぎったサンドイッチを口に放り込んで咀嚼そじやくする。

(ああ美味しい。パンに塗られた濃厚なバターバターの旨味うまみ。ハムの塩気。卵の甘み。それらを包み込むシャキシャキのレタス！)

って、浸ってないで魔力魔力つと。私は空いた右手に魔力を集めた。

「じゃあこのくらい……あれ？」

魔力弾を作る要領で、手の平に魔力を集めようとしたのだけど、なぜか思っていたのより大きなものができた。作ろうとしたのは私のこぶし大のサイズ。なのに、子供の頭ほどの大きさになってしまった。

(勢いよく魔力を流しすぎた？)

規模とか色々考えなきゃいけない水球ウォーターボールなら制御を失敗する事もありえるけど……だけど実際、思っていたサイズと違う魔力玉が目の前にあるんだから、簡単なはずの魔力移動を失敗したって

事だ。

『ありがとう、マスター』

蜜色の魔力玉を手にしたまま思考に沈んだ私に、グノーがお礼を言ってそれを取り、東屋あずまやを出た。彼の後をルフィーが追う。ディーネとサラはルフィーの肩に乗っていた。

グノーは魔力玉を二つに割って、片方をルフィーに手渡す。サラがグノーの肩に飛び移り、彼らは半分の魔力玉をさらに半分に分け合って、それぞれ口をつけた。

私は精霊達の食事となった魔力と、それを作りだした自分の右手を交互に見やり、グーパーと手を動かして首を傾げる。

「ミラー、考え事は食べてからにしろよ」

「あ、うん」

（ま、いっか。気のせいかもしれないし）

私は割とめんどくさがりだ。だから無意識に、小さな魔力玉を四つ作るのを手間に思っ、一度に出した可能性もあるよね。

私は考えるのをやめて、サンドイッチにかじりついた。

第二話

昼食後はディーネとの約束通り、腹ごなしも兼ねて水遊びをする事になった。庭園から練兵場の管理施設裏に戻ってきた私達は、ただ今水玉合戦中。

「風爆イン水球！」

金緑色と金青色の光の輪が重なって、一つの魔法陣が描かれる。出現した水球ウオーターボールがケビンさん達の頭上に達した瞬間、私は指をパチリと鳴らした。

「ブレイク！」

水球ウオーターボールが破裂し、水が雨のように降り注ぐ。

「うお！ 冷てー」

「きゃー、ミラちゃんでは容赦ない！」

「ミラさん、味方まで濡らしてどうするんですかっ」

「ごめんなさい」

「あははは、いいぞミラ！ もっとやれ！」

対戦カードは私・ガイ・ブルムさんチームとケビンさん・イエナさんチームだ。

ルールは簡単。最大限に弱めたウオーターボールを打ち合っ、十分間に、より相手をずぶ濡れ